井伏文学における自己回復の道

江後寛士

一

昭和四十一年十一月、井伏鱒二は文化勲章を受け、翌月「黒い雨」により野間文芸賞を受けた。その授賞式の席上、河上徹太郎が「井伏文学は悲しみの文学です。山椒魚は悲しんだ。井伏は処女作から悲しみの文学を書いたのです。」という感銘深い祝辞を述べた。[1] もっとも、この結びの部分だけで深い感銘を与えることは無理であって、次のような前置きが不可欠である。それは、「ある日テレビを観ていると、井伏がとことこ歩いて来るのです。見ると首に襟巻なんか巻いている。ところが、襟巻と思ったのは実は文化勲章であって……」というものである。井伏がいくら村夫子然としていても、テレビニュースの一連の流れの中に登場したのであれば、文化勲章を襟巻と見誤るはずはないと思うのだが、親しい間柄であるにもかかわらず（あるいは親しい友人ゆえに）してしまった河上の一瞬の誤認は、井伏の人柄ばかりでなく、井伏文学の特質と、その受容のあり方までも象徴しているように思われる。

井伏文学は、明治以来のわが国の近代化に歩調をあわせた文学のどの流派にも属さず、認められないからといって世を拗ねて隠遁するでもなく、常に庶民の俗なる生の中にあって、人間の小さな真実の姿を書き綴ってきたのであった。このような井伏には、日本人として最高の栄誉たる、官製の文化勲章を首につけて歩く晴れがましさは、傍目にも不似合なようなところがあって、襟巻と見る方がむしろ自然かもしれない。だが、襟巻と見られてしまうところが、うれしくもあり、また悲しいことでもあるのだ。

河上徹太郎は、〈悲しみの文学〉だと言った。まさにその通りである。初期においては、山椒魚やサワンに託して自己喪失の悲しみを吐露したが、その悲しみをユーモアによって柔らげ、抒情を中断することによって解消しようとした。中期以後になると、自我の確立が果たせないまま自己回復をはかり、庶民的共同体の中で次第に確かな存在感が得られるようになるが、悲しみを表面に出さなくなったときのユーモアはナンセンスと受け取られ、戦後になっても同じ方法を持続させると、〈高級落語〉[2]だという不満表明の批評が現われた。しかし、「黒い雨」に至って、現実を受容しなければならぬ庶民の悲しみは、自己回復の願いの基盤となり、誤解を受けない形でみごとに定着したのであった。こうした自己回復が、いかなる場で、いかように行われたか。

初期の井伏は、自己喪失の悲しみを岩屋から出られぬ山椒魚に託したが、その後、岩屋を出た気配はない。岩屋の外の広い世界を自由に泳ぎまわることによって自己確立を果たそうとした様子は全然ない。農村の純朴な男や漂民や都会の小市民を書き、あるいは井伏自身が望郷の念をもちながら東京に住んだり、好んで地方への旅に出たりしたのも、岩屋を出るための試みであったようには思えないのである。

それでは、絶望的な自己喪失の状態のまま、出口のない岩屋の中で、どのようにして自己回復をはかり、自己確立を果たそうとしたのであろうか。初期を過ぎてからの井伏のもつ安定感は、自己確立の夢を放棄して現世超脱の境地に到り着いたゆえとも思えないのである。岩屋から出られなくなった山椒魚は、「いよいよ出られないといふならば、俺にも相当な考へがあるんだ。」とつぶやくが、そのときの山椒魚には〈何一つとしてうまい考へがある道理はなかった〉のであった。しかし、蛙と気持が通じあってからのちの岩屋の中は、意外な広さを獲得していったようなのである。もちろん、目高や水すましの住む外の世界の広さとは異なり、自由の意味も異なるが、そこには、谷間もあれば、川の流域もあり、漂流船を浮かべる海さえあったのである。

井伏が岩屋を出なかったとすれば、この空間に住む庶民の安定感はどのようにして得られたのか。外の世界を自由に泳ぎまわることのできた目高や水すましたちが、自我の分裂、崩壊に見舞われたのに対し、岩屋の住人たちは堅固な自己を保持することができた。そこは〈なつかしき現実〉になぞらえて作られた仮構の世界であったのだろうか。いずれにせよ、外なる世界の人々の自我の崩壊に対比して言うならば、内なる人々は岩屋の中で、確固たる自我を確立していったと言わなければならないが、それでは矛盾が生じる。岩屋の内なる世界は、ムラ共同体的な社会であって、近代的自我史観に拠らない世界だからである。

井伏は、〈基本的には現実とかかわりながらも、現実とつねに一歩退いた所で自己を確立していった〉[3]と言われるが、岩屋の内と外とを隔てる一歩だとすれ

ば、意外に大きな一歩だということになるだろう、また、〈自己という洞穴を出て庶民のうちに方法的に韜晦しつつ、自己を自然へ解き放った井伏は、逆に自然という別の広々とした洞穴に捉われはしなかったか。山椒魚は、孤独な意識の洞穴を出たとしても結局水中世界という自然の洞穴を出ることはできない。(4)〉と言うときの〈自然〉とは岩屋の中の〈水中世界〉であり、孤独な意識を解放することはできても、身は囚われたままとする考え方のようである。そして、庶民の住む自然の、岩屋の内なる世界が意外に広々としていることは認めるけれども、それが身を縛るとする基本姿勢は変らない。

「山椒魚」の構図は、岩屋の外が自我の確立した自由な世界であるとする設定であるから、右のように考えるのは当然であるが、近代的自我史観に立場を固定したままで、井伏を論ずるに、韜晦、後退、保身といった断罪的評語を繰り返していたのでは、局面は転回しないのではないか。外の自由な世界にいる人々が自己崩壊の悲劇に見舞われたのに対し、内なる人々が小さいながらも確かな自己を保持しえていったとすれば、どちらに主体を置くかによって、内と外は逆転しかねない。比喩に終始するのは好ましくはないが、安部公房の比喩を借りるなら、運動場のトラックを走る場合、スタートラインから逆に向って走って行けば、ゴールラインは近いではないかといった、一八〇度の発想の転換が必要である。岩屋の内なる庶民の住む世界を前近代的だと言って終ることなく、近代的自我史観の及ばぬムラ共同体的社会における自己確立のあり方を探らねばならない。井伏鱒二の描いた庶民の生き方は、それを存分に教えてくれるだろう。

二

「山椒魚」「鯉」「夜ふけと梅の花」「寒山拾得」「屋根の上のサワン」など初期の作品は、いずれも鬱屈した青春における自己喪失の苦悩を書きつけたものである。自己確立の夢は、早稲田大学のプールに放った〈私の所有にかかる鯉〉があたかも〈王者の如く〉家来を従えて泳ぎまわるような絶大なものであり、その願いは秋の夜ふけの空に向って放たれるサワンの鳴き声のように切ないものであるが、結局はサワンに取り残され、鯉は冬の厚い氷の下に閉ざされて氷上に三間以上もある鯉の絵を描いて自らを慰めるしかない状況に追い込まれるのである。「夜ふけと梅の花」にしても、村山十吉の五円におびえる私は、〈何しろ明らくならなければならない！〉と自らを鼓舞すべく、〈先づ血祭にコーヒーとしる粉とを〉のんだり、ポスターの美女やピエロを相手に安酒をのんだりするのだが、白い梅の花や高い塀が一年来の妄想のためと知って、〈俺は酔つぱらへば酔つぱらふほど、しつかりするんだぞ〉と虚勢を張らねばならないほどの、虚しい底なしの空洞をかかえた青春が描かれているし、「寒山拾得」の〈げらげら、げらげらッ〉という、悟達の拾得を真似た陰鬱な笑い声は、喚きたてれば喚きたてるほど、内なる空洞に虚しく響くばかりなのである。それが飄逸な仕立てになっているので、一層痛ましさを感じさせ、やりきれない思いを読者に与えるのである。これらは、「山椒魚」における蛙との和解成立以前の状態が描かれていて、前作「幽閉」の孤絶した世界と同じなので、「幽閉」型と呼んでおこう。

こうした自己喪失の嘆きを書いた「幽閉」型の時期が井伏の初期であり、およそ昭和四年頃までである。昭和二年に芥川龍之介が自殺したことを想起すれば、井伏の青春における自己喪失のありようは、時代状況と軌を一にしていたことがわかる。その後、多くの人々はファシズムの激浪の中を生き、自己確立は保留されたまま敗戦を迎えることになるのだが、井伏は、「朽助のゐる谷間」（昭4・3）「谷間」（昭4・1～4）「丹下氏邸」（昭6・2）などによって、自己拡充が果たせなくても安定した自己を保持しうる世界を探し当て、以来、それを飄々として維持してゆくことになるのである。これらは、岩屋の内部が谷間へと拡大した、朽助などの庶民が住む世界なので、「谷間」型と呼んでおくことにしよう。

この「谷間」型においては、安定した自己の保持とは言えるけれども、近代的自我の確立とストレートに言えないところに井伏の苦しさがあり、同時に独自性も認められるのだが、そこに、井伏にとって〈他者〉とは誰だったのだろうかという問いが出て来る。「幽閉」（大12・7）には他者はいないが、「山椒魚」（昭4・5）には、二年間対決した蛙という他者が設定された。しかし、両者が互いを許しあうところまで行ったがゆえに、その後その他者との持続的対決による緊張関係を保つことはなく、したがって自我の確立を果たすということにならず、両者の許容は親和関係となって、そこにムラ共同体の原型のごときものが発生したのである。「谷間」の芽生えである。そこには、対決する他者はいない。強いて他者意識について言うならば、そのときの井伏にとっての他者は、岩屋の外の世界であったのではないだろうか。ここに井伏の大きな転換があった。岩屋の外の世界は、自我の確立をめざす近代人の住む近代社会である。ありうべき自我というものが先験的にあると信じる近代主義者たちや制度改革によって実現しようとする左翼陣営の闘士たち、及びそういう近代主義そのものを他者として見

据え、岩屋の内に自己回復の可能な世界を探り出そうとしたことは、近代的自我の確立を観念的幻想に過ぎぬものと認識したことを意味し、岩屋の外の世界から自己を遮断したことを意味する。

山椒魚が嘲笑した目高たちの一斉に左によろめく姿は左翼陣営の人たちに対する諷刺であろうとすでに言われているが、このたとえにならって言えば、＜くつたくしたり物思ひに耽つたりする＞虫けら同然の小蝦は私小説作家であり、＜水底から水面にむかつて勢ひよく律をつくつて突進する＞蛙は新感覚派であるかもしれない。井伏はこれらすべてを他者として対決し、独自の道を歩もうとするのである。こうして獲得された独自の道は、時代の流れに左右されない一貫したものであり、頑固なまでに自己の道を守り抜いてきたように思われるが、岩屋の外なる世界に背を向けて独自の道を歩むに至る道程は決して平坦な一本道ではなかったようである。

昭和二年、『陣痛時代』の同人が一挙に「ナップ」に参加しようとしたとき、たびたびの談判にもかかわらず左傾を拒みとおした（雞肋集）というので、井伏は目高のごときよろめきは一切しなかったのだと長い間信じられてきたのであったが、無産階級文芸雑誌『新文化』（昭3・4）にソヴィエットの教育ポスターを翻訳していたという事実[5]が報告されて、当時の曲折の一部が明らかにされた。左傾しなかったのは＜気無精＞ゆえであるという当人の言をそのまま信じた者はいなかったであろうが、目高の仲間に入ろうとしたことがあったと推測した者もまたいなかったのではなかろうか。だが、わが愛すべき山椒魚が外の流れに一度は身を置いたことがあったと知らされてみれば、岩屋を終のすみかと定めるまでの迷いと苦悩のさまが一層深く思いやられ、居直りとも見える決断がたやすくなされたのではなかったことを思い知らされるのである。

「鯉」「屋根の上のサワン」などの「幽閉」型から、「朽助のゐる谷間」「丹下氏邸」などの「谷間」型への移行も、＜所詮は屁は風ですがな＞といった具合に、飄然と転換できたわけではなかった。あきらめにも似た庶民の従順さは、結果的には無抵抗な自己放棄と見えようが、何としてでも生き抜こうとしてそこにたどりつく過程には、庶民特有のしたたかな計算が働いているのである。

都会の「谷間」である「炭鉱地帯病院」（昭4・7）の三人の登場人物は、一人の少女の死をめぐって実際は訴訟すべきだと思っていながら、三人ともそれを他人のせいにして、自分の本心は懸命に隠そうとする。この場合、訪問者であり、語り手である＜私＞は世間の代表者である。彼らは世間に対して明瞭な自己を見せないことによって生き抜こうとしているのだ。ドクトル・ケーテーは、＜私たちの虚弱さ＞が、たとえば＜水の表面張力＞のような働きをして＜調節＞しているのだと言い、父親の＜本格的な逃避＞に驚いて見せて自分の逃避の程度を柔らげようとする。父親は、＜この現実は私達が不幸にうちのめされるやうに前もつて制度づけられて＞いて、この社会の制度は＜大地と同じく動かすべからざるものです＞と言い、娘の死というような大きな不幸に見舞われたときには＜能ふかぎり嘆けばよろしい。ラメンテイションのみが私達に与へられた自由です＞という趣旨のことを嘆息とともにもらすのである。看護婦は、生命五欠説を信じるなら、絶望より欲望に走るのが当然だと言って、娘の死は＜愛撫し合うべき場所が適当でなかつただけ＞だと問題の中心をそらして、＜卑屈＞と言われるかもしれないが自分が＜沈黙＞を守っているのは、婚期が遅れているから＜世間ていゝ＞をおとなしく見せておくためだと言うのである。

彼らは、明確な自己主張をしない。自分の責任においては何も言わない。それが＜逃避＞とか＜卑屈＞とかいった批判を受けかねない態度であることを知っているのだが、強弁による失敗、挫折を回避し、自己を守るために互いの諒解の上になされるのである。

誰も表立っては主張しないにもかかわらず、彼らの共同の意志によって訴訟は成立し、裁判は行われるだろう。責任をもつ主体は不明のまま、事は順調に運ばれてゆく構造になっているのである。自己主張がないから、たとえ不調に終っても、傷つくものはいない。世間というムラの掟に従っているかぎり、＜物笑ひの種＞にはならないですむのである。

朽助など「谷間」の人々は、一見無智で純朴なお人好しのように見え、彼らは自らの行為を分析したり論理的に点検したりはしないから因襲に盲従しているように思われるが、案外そうではないらしい。彼らは決して負け犬ではないのだ。「炭鉱地帯病院」の少女の父親は、次のような別れのことばを述べる。

このかたは私達が訴訟の計画を正直に告げなかつたというやうな意味のことを、呟いてゐられるやうですが、それは私達を責めるといふものです。その責め道具として何だか三つの外国語を用いたりなさいましたが、人々のテンダネスを虚偽として指摘する立場へ自分を推薦なさる態度は、いかがなものかと思ひます。さふいふやうなことをする人の忠告は贋造紙幣に似てゐます。

岩屋の外の世界では、責任の所在を明らかにし、訴訟を起こす主体を明確にす

ることが近代的自我の確立の基本であり、それなしにアイデンティティはありえないとするのであるが、岩屋の中の「谷間」では、責任を追求しない〈テンダネス〉によって、互いの存在を保証するのである。彼らは、岩屋の外の世界観をニセ札に似ているとまで言い切るのである。これは、井伏の宣言と言ってよかろう。炭鉱地帯といえば、朽助らの住む農村に比べればやや都会的な地域であり、医者や看護婦は知識人的要素を有する職業で、少女の父親も語り手の〈私〉が翻訳した雑報的文章によって相当に知的な発言をしたように描かれているが、それゆえに自らの生き方を論理的分析的に明らかにすることができたのである。井伏はこのようにして、「谷間」的世界の構造をわれわれに示してくれたのである。

それにしても、〈贋造紙幣〉とはよくぞ言ったものである。これは、自我の確立を第一義とする近代主義への真正面からの挑戦である。思えば、われわれの周囲にはニセ札的近代化の形骸が無数にあり、われわれはその中にどっぷりと浸って生きているのではないか。一例を挙げれば、住宅環境である。アパートもマンションもなるべく隣人と接触しないように設計され、庭つきの一戸建てのマイホームを手に入れても、それをブロックの塀で囲んで隣人を拒否する態勢を例外なく作ってしまう。どんなに堅固な塀も防犯の役に立つものはほとんどない。建築家黒川紀章氏の提言に従って生垣を作り、刑務所に似たブロック塀をいくらかでもソフトにしようと配慮してみても、結果的にはブロック塀と同じように隣人を拒否する障壁の働きをしてしまう。いったい、われわれは塀をめぐらして守るべき何を所有しているというのだろう。山の斜面を削って造成された住宅団地の舗装された道路の両側に続く、形骸化された門塀の寒々とした風景は、わが国ではごくありふれたものになっている。自己実現の願望は、「夜ふけと梅の花」の大邸宅のミニチュアとなって並んでいるように思える。近代的自我を求めあぐねた亡霊が近代の擬態の中に憩う風景の象徴である。

「谷間」の人々の住むムラ共同体には、このような擬態のもつ空虚さはない。「丹下氏邸」の男衆夫婦の安定感や丹下氏の〈くだり坂のところも登坂のところも同じ足どりで歩く〉歩行ぶりに象徴される安定感は、ニセ札とは無縁のものであり、「炭鉱地帯病院」の三人が示してくれたような構造の上に成立するものである。

三

ある権威を批判するには、その反世界を描いて見せることが有効である。「川」（昭6・9〜7・5）は、岩屋の外なる自由な世界の陰画として書かれている。川の源流から河口に至る流域の住人たちは、自我不在、あるいは自我無効の状況から逃れることができないでいる。自己主張も許されず、自然の摂理に従って従容として死につく庶民の生きざま、死にざまは、近代の貪欲な自己実現の欲望に対する痛烈な批判として存分の機能を発揮していると言ってよいであろう。

このような庶民は、決して孤独ではない。岩屋の外から見ると、みじめに見えるだけのことである。自然の摂理、世間のしきたりに従いながら、日常性の中に古くからあった連帯――連帯が岩屋の外のことばであるならば、運命共同体的世界の暗黙の了解と言ってもよい、それは、山椒魚の孤独を解消するのである。

「谷間」の住人は東京の下町にもいた。「掏摸の棧三郎」（昭8・2）には、安い学生下宿を転々とし、時には家主の夜逃げに付き合う庶民の生き方が、気弱であぶなっかしいけれども、温かく懐しい人間関係の中に描かれている。彼らは、生きることの困難な時代をくったくもなく生き抜く、お人好しの小さなエゴイストである。

エゴイストとは言っても、開かれた岩屋の外の世界で自我の確立に存亡を賭けた人たちとは異質の存在である。瀲石の〈則天去私〉の世界を、岩屋の内部という比喩で語ることはできないが、〈則天去私〉以後の小エゴイストたちに似た存在である。だが、「谷間」の人たちは、深沢七郎と同様の土着性（都会も例外ではない）を基盤としており、決して選ばれた人たちではない。おそらく井伏は、〈則天去私〉の遥かかなたの平凡な風景の中の谷間を、〈丹下氏〉のような足どりでとことこ歩いているのであろう。

こうした生き方は、「青ケ島大概記」（昭9・3）「ジョン万次郎漂流記」（昭12・11）のような極限状況や、「さざなみ軍記」（昭5・6〜13・4）のような戦乱の中で、淡々として生き抜く名もない庶民の即自的日常的な生き方として定着している。

「さざなみ軍記」の八月十九日の翌々日、平家の残党を嘲笑した女が捕えられ、いろいろと訊問を受けたあと、〈私〉によって判決が下される。

――お前は実際に、私たちのことを摘みとられた蜥蜴の尻尾だと思ふか。

捕虜は田舎言葉で、まことに悪うございましたと答へた。

――お前は三人の兵士にとりおさへられたとき、蹴られたり殴られたりしたか。

蹴られたりはしなかつたが、三人の兵士たちは彼女の肩や胸の筋肉をつま

んだりしたと答へた。（中略）

――お前は注意深い婦人である。私はお前を放免する。お前は田圃の細みちを帰つて行き、これまでのやうに筵畳を織つたり笑つたりしてもよいだらう。

「笑うな」という禁止は珍しくないが、「笑つてもよい」という許可を与えうる人間がこの世に存在するだろうか。彼女たちは、元来許可なくして〈小蝦〉のように〈よく笑ふ生物〉なのである。彼女たちの日常は誰に許可されなくても、過不足なく持続するものである。そうした日常のくったくのない笑いを許可するとは、よほど醒めた、意識的な作家でなければできることではあるまい。笑うことは日常性の保証であり、右の場面設定には、いかなる〈兵変〉にも動ぜぬ庶民の日常態[6]を定着させようとする井伏の積極的な意図が読み取れるのである。

笑うということは、一見無雑作なようで、案外そうでないらしい。「山椒魚」の〈失笑〉や〈嘲笑〉、「寒山拾得」の陰惨で深刻な作り笑いなど、明るくないものもあるが、「谷間」の庶民の笑いは、概してくったくはなさそうである。しかし、〈一たん笑ひそこねたらもう一つ息を吸ひ込まなくては笑ひ出せない〉（「国旗」昭9・1）ような、むずかしい呼吸があるのだ。一度笑いそびれたら、同じ笑いはもう二度とできないのである。庶民は物事にこだわらず、気むずかしくはないが、決して無神経ではない。だが、庶民はよく笑う。笑うことはその世界における確かな存在証明なのである。自分は世間に笑われないように細心の注意を払う反面、〈物笑ひの種〉になるものを見つけると、無遠慮に笑いとばす。笑うことは、彼らの存在における自由の保証であるが、同時に、守るべきモラルの確認でもある。だから、彼らの自由は岩屋の外のものではなく、「谷間」という制約された世界の中に限定されるのである。限定された自由なんてあるのか。この限定は自由を自由でなくしてしまうものであるとの判断が当然出て来るだろう。しかし、〈規定（制約）が厳しければ厳しいほど、その規定の中で、自己を実現する精神の自由もまた大[7]〉となるという精神作用をわれわれは認めなければならない。

その〈自由〉は、観念も幻想ももたぬ即自的な庶民生活においては、アナーキーなまでの自在性となって現われる。例えば、「多甚古村」（昭14・1～15・3）である。〈戦争を謳歌する国策文学ではないにしても、批判精神を欠いた間のびのした風俗小説に堕してしまった[8]〉という厳しい批判もあるが、非常時でありながら、間のびのした勝手な生活を気ままに展開しているということは、〈日常態への埋没〉ではなく、むしろ積極的に日常を保持しえていると言うこともできよう。変らぬ日常性を保持することは、戦争遂行に熱狂する者への痛烈な批判となるはずである。戦争は、教育勅語による国家統一を一挙に敢行し、ムラ人たちをも国家装置を支える一員として組み込もうとしたのであったが、彼らは自分が国家を支える主体であるという観念を一切もたないのであった。彼らは、明日の勝利より、今日の生活の方が大切とばかり、正月ともなれば、シャモ賭博をはじめるのである。彼らは、反戦論者としての主体も確立していないから、強制されれば戦場にも赴く弱さをもっている。しかし、彼らは反戦論者以上に戦争を回避しようとする非戦論者である。なぜなら、戦争を阻止するためには戦いをも辞せずという反戦論の矛盾を彼らはもたないからである。

井伏自身徴用されて、シンガポールに赴き、新聞の編集責任者としての仕事をした。「花の町」（昭17・8～10）には戦勝者としての余裕が皆無とは言えないし、「貴方はジャランジャラン（散歩の意）、キャンですか、ノー・キャンですか」「キャンです」といった珍風俗で笑いを誘う手慣れた手法に頼った面もあるが、権力をふりまわす軍人の愚劣さへの批判も忘れてはいないのである。しかし、井伏は〈猫をかぶつて〉その間を過したので、権力批判にその本領を見ることはできない。むしろ、重要なことは、右の手慣れた手法、つまりリアリズムとユーモアを維持したことにより、戦地の状況をも平時の感覚でとらええたことである。「谷間」の日常感覚は、一見弱そうに見えながら、このような異常な状況には、したたかな頑固さを発揮するのである。

四

戦後の自由な時代になると、権力批判は一つの実を結んだ。「佗助」（昭21・5～6）である。「生類憐みの令」なる悪法に従うお役人の愚かな形式主義に対する諷刺はみごとであり、大地震の陥没によって彼らを地底に沈めてしまうという厳しい断罪のしかたには、敗戦に至るまでの権力の横暴に対する鬱積した憤りを一挙にぶつけた感がある。だが、歴史小説は、言ってみれば一つの比喩の世界にすぎない。「山椒魚」や「谷間」型の小説も同様である。井伏を傍観者にすぎないとする批判はそこから出て来る。井伏の「物」を見る態度は徹底している。批判精神は、正確な観察を前提とするから、よく見なければならない。「佗助」の植徳は、気絶するほど鞭打たれながら、紋太夫の〈粋な所作〉をつぶさに見ている。井伏がこの植徳の側にいることは確かなのだが、植徳そのものになりきっ

て植徳の痛みをおのが痛みとしているかというと、まだいささかの隔りが感じられるのである。傍観者という批判も故なしとしない。

「黒い雨」（昭40・1～41・9）には、その隔りがほとんど感じられない。ひとの日記を借りたという点では「多甚古村」も同じであるし、古記録によった歴史物も漂流物も成り立ちは同じである。それにもかかわらず、相違が認められるのは、井伏の描く世界が比喩から現実そのものへという質的な変化を遂げているからではないかと思われる。

「追剝の話」（昭21・9）には、＜今度の大戦争を始めるときにも、儂らは役場から何の相談も受けなんだ＞という強烈な戦争批判があるのだが、本筋から外れたところに添えられているだけであるし、「橋本屋」（昭21・11）は、戦争犠牲者の悲惨なさまを＜当てこすり＞以上の鋭さで描き出しているものの、作者は鮎釣りの旅人以上の深入りはしない。これは、「朽助のゐる谷間」の水没に立ち会った文学青年の立場がそのまま続いていたためであるが、次第に現実との距離を縮めていくようになる。おそらく、戦時中の徴用、疎開、原爆といった体験が現実へ立ちもどらせたのであろう。

「白毛」（昭23・9）になると、＜垂らしワイシャツ＞が町からやってきたよそ者で、白毛を抜かれる疎開中の＜私＞は、まぎれもなく「谷間」の住人になっているという変化が見えはじめる。また、「遥拝隊長」（昭25・2）の作者が左右イデオロギーのいずれをも否定するのは、思想的な面からだけでなく、＜村＞や＜こうち＞が＜めげる＞ことを心配するムラ人と同じ世界に住んでいるからであろう。井伏は、徴用されて南方へ送られるとき、日本軍快勝のたびに東方遥拝をさせ、すぐに「ぐずぐず云ふと、ぶつた斬るぞ」とわめく中佐の指揮下にあった。海音寺潮五郎のように「斬ってみろ」とやり返すことのできない井伏は、両極端に走る悠一や与十を否定しながらも、そっとなだめて＜こうち＞がめげないように心を配る、気のいい、声なき庶民の一人であると言えよう。

徴用中のことを書いた「犠牲」（昭26・8）の冒頭で、戦地の体験は＜少し遠慮しながら言葉を端折って＞話そうと述べている。理由は、「塹壕のなかのことは語らない」という戒めがあって、それは＜戦争は悲惨なものにきまってゐる＞からであり、「何も今さら云ふな」ときめつけているように思われるからであるという。＜遠慮＞せず暴くことは、自然主義以来、誠実な作家態度として認められてきた。しかし、井伏は、それが真実を明らかにし、自己確立の道へ直結するとは考えなかった。だからといって、戯画という方法も、師として仰がれながら、大宰ほどには徹底しなかった。いずれもその道の果てには破滅があるからである。その意味では調和型の作家と言えるが、志賀直哉のような強い自己主張によって得られた調和ではない。だから、妥協的な調和にすぎないではないかという批判を甘受しなければならない。そこに、「山椒魚」以来、岩屋の内なる世界で、ささやかな自己回復の道を求めてきた井伏の悲しみがある。徹底した生き方はみごとではあるが、その果てには、破滅があり、死がある。観念や幻想をもたぬ庶民にとっては、美しい死といえども、死は死以外の何ものでもないのである。

「戦死・戦病死」（昭38・4）では、徴用中の戦友の死を回想したあとで、＜自分がまだ生きてゐるからと云つて、寝ざめの悪い思ひをするやうなことはない。（略）私は自分で自分への点数を辛くしたらやりきれないと思ふ。＞と言っている。思わずもらした本音のようだが、決して自分を甘く採点するというのではない。犠牲者の美化につながるような危険な倫理を拒否しているのである。国体保持のため民族自決をうたった華やかな論理、はかない美をうたう詩人の甘い精神性を峻拒するのである。だから、遠慮しながらも、井伏は事実を淡々と書きつける。名誉の戦死などという華々しい死は一つも報告されない。破滅を回避して生き抜こうとする庶民にとって美しい死はない。その醒めた目には、死がすべて無駄なものに見えても不思議ではない。それは一見冷徹に見えるかもしれない。しかし、そこには悲しみがある。物事を美化し、陶酔することのできない者の悲しみ、現実をありのままに受け入れなければならぬ者の悲しみが隠されていることを見逃してはならない。

「黒い雨」においては、この悲しみが作品中に顕われている。と言っても、充分に抑制されたものであって、作者が直接悲しみを語るのではなく、作中人物閑間重松に託すことにより、また「被爆日記」の清書という、姪の縁談にはあまり実効の期待できそうもない行為に没頭させる設定によって描出されたのである。

さて、右の構図の上に、原爆という、人類にとって最大級の政治的素材を取り上げて、井伏は何をなしえたであろうか。

広島は焼けこげの街、灰の街、死の街、滅亡の街、累々たる死骸は、無言の非戦論。（1）

戦争はいやだ、勝敗はどちらでもいい。早く済みさえすればいい。いわゆる正義の戦よりも不正義の平和の方がいい。（11）

「この屍、どうにも手に負えなんだのう」

トタン板を昇いて来た先棒の兵がそう云うと、

「わしらは、国家のない国に生まれたかったのう」

と相棒が云った。(11)

これらは、岩屋の外の世界にあって、自我の確立という幻想に向って奔走し、国家と対決したり支持したりする人々には言えないことばであり、「谷間」のムラ社会に住む、国家装置に組み込まれない人でなければ言えないことばである。

私たちは、「谷間」のムラ社会と同じ構造をもつ〈未開社会〉に学ばなければならない。ピエール・クラストルによれば、〈未開社会とは、ひとつにして全体であろうとする不分割の社会、階級なき社会、支配する者と支配される者への分割がない社会、社会から分離した権力装置のない社会〉であり、〈未開社会は、政治以前の劣った萌芽的社会であるどころか、完成した、充実した、成熟した社会であるからこそ、国家をもたない〉(9)というのである。

私たちは、これまでの歴史概念を一八〇度転換しなければ、未開社会の成熟を認めることはできないだろう。しかし、自我の確立がもはや進化論では達成できないことに気づいているはずだ。井伏が岩屋の外に出ないで、内なる「谷間」のムラ社会に住み続けたのは、この一八〇度の転換を意味する。世の人々が岩屋の外で近代的自我確立の夢を追っているとき、井伏は逃避だとする批判に耐えながら「谷間」の人々とともに住み、彼らを描くことによって自己回復を試みていたのである。そして、原爆が、国家とは無縁なはずであった岩屋の内なる「谷間」の人々まで滅亡させようとしたとき、はじめて現実と切り結んだ日常態の復権をめざすことになったのである。それが、「黒い雨」であった。

注

(1) 小沼丹「井伏鱒二〈作家と作品〉」(『日本文学全集41、井伏鱒二集』昭42・5、集英社)

(2) 寺田透「井伏鱒二論」(『批評』昭23・3)

(3) 槇林滉二「初期の井伏鱒二――『岬の風景』を中心にして――」(『近代文学試論』第10号、昭47・9)

(4) 徳永恂「井伏鱒二論――黒・水中世界・自然のナルシシズム――」(『人間として』終刊号、昭47・12)

(5) 西田勝「井伏鱒二の知られざる一面」(『近代文学研究』第4号、昭42・8)

(6) 拙稿「井伏鱒二の世界」(『近代文学試論』創刊号、昭41・5)

(7) 大越嘉七『井伏鱒二の文学』(昭55・9、法政大学出版局)

(8) 田辺健二「『多甚古村』論」(『近代文学試論』第10号、昭47・9)

(9) 今村仁司「国家を拒否する社会」(『現代思想』9巻10号、昭56・9)